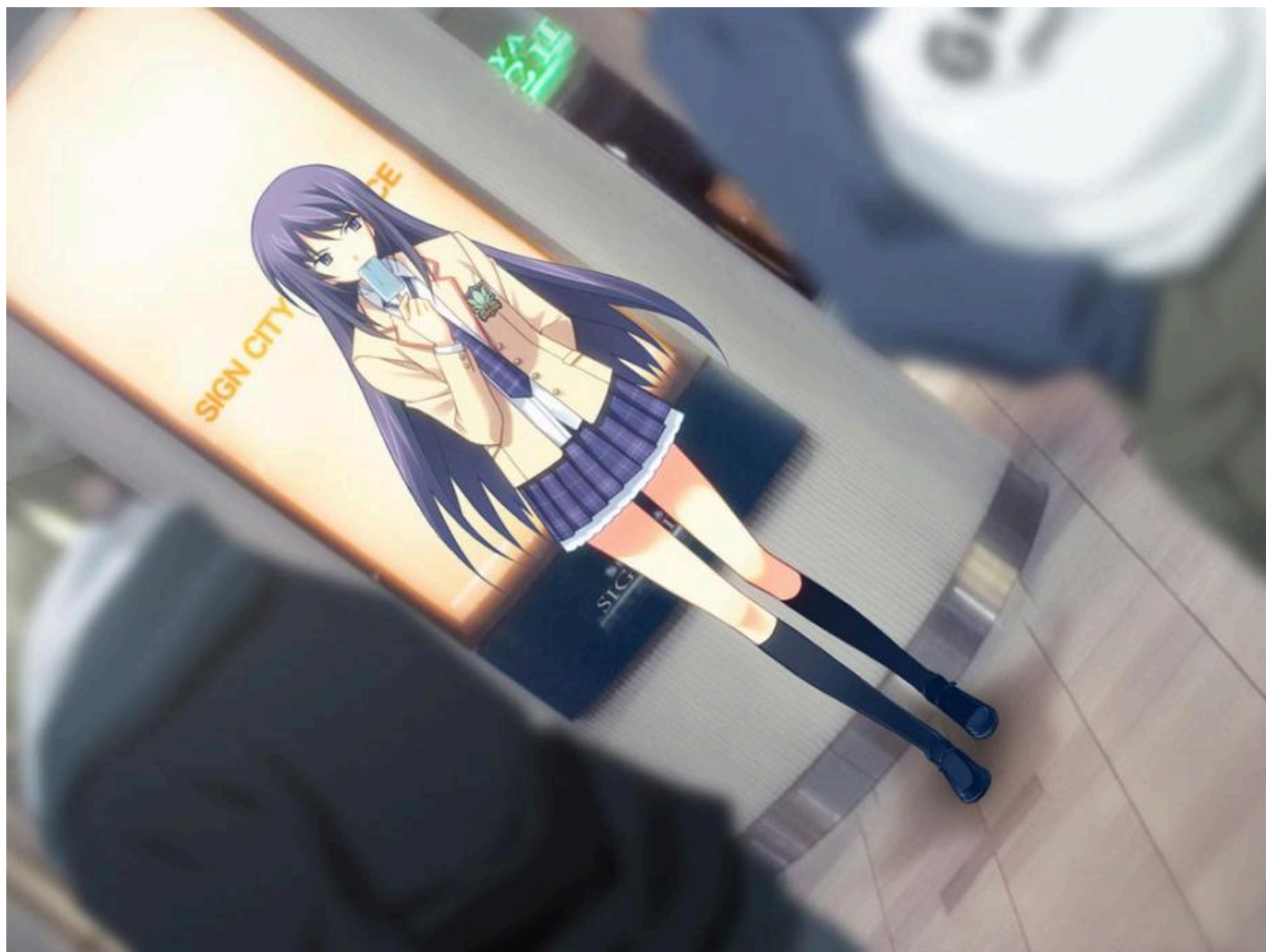




「Chaos;Head」ショートストーリー

混沌の扉～あるいはギガロマニアックス的シュタインズゲートの選択？

原作：ニトロプラス×5pb. 著：林直孝



「くっ、見失ったか」

地下へと続く、長いエスカレータ。

そこを駆け下りたところで、私は小さく舌打ちした。ディソードを肩に担ぎ、周囲を見回す。

希テクノロジーの端末—ヤツらは「ポーター」と呼んでいるらしい—を渋谷駅で見かけ、ここまで追ってきたが、どうやら逃げられてしまったようだ。

渋谷駅の地下は、普段地下鉄を利用しない人間にとってはさながら迷宮だ。複数の地下鉄と私鉄が乗り入れているため、構内は複雑極まりない。

私が立っている場所からだと、副都心線、半蔵門線、田園都市線のホームへと行くことができる。

いったい、どっちへ逃げていったのか。

「おい、今、リュックを背負った小太りの男を見なかったか？」

ちょうど、私の横を通り過ぎようとした男—制服を着ているところを見ると、私と同じ高校生のようだ—に、声をかけてみた。

すると。

「質問の前に名乗ったらどうだ、黒髪ロングの女よ」

妙に芝居がかった口調で、そう言われた。

困惑しつつも「蒼井セナ」と名乗ると、男はおもむろにケータイを取り出した。

「...俺だ。今、妙な女と接触した。...ああ、機関の刺客である可能性がある。...いや、あるいは、機関に反逆し逃亡中の女、かもな。...一時間以内に連絡しなかったら、俺はやられたと判断して、そ

のまま計画を続行しろ。それがシュタインズゲートの選択だ。エル・プサイ・コングルウ」

意味不明なことを電話先の相手につぶやいて、ケータイをしまう。そして、私へと向き直ったかと思うと、偉そうに胸をそらした。

「貴様、何者だ？」

「だから、蒼井セナだと名乗っただろう。それより、音を聞かなかったか？ ヒュンヒュンというー」

「そうか」

私の言葉を聞いた男は、そこで納得したようにうなずいた。

まだ途中までしか話していないのだが...

「ついに始まるのだな...アレが」

「アレ、だと？ サードメルトのことを言っているのか？」

「いかにも。そんな名だ」

私はとっさに身構えた。

「お前、何者だ？ まさか...」

こいつからは、ギガロマニアックスの気配が感じられない。

ならば、希テクノロジーの関係者だろうか？

さっき追っていたポーターの仲間かもしれない。

もしそうならば、色々聞き出さなければならないことがある。

警戒している私をよそに、男は唇を歪めて笑い出していた。

「ククク、フーハハハ！ そうか、俺の正体に気付いてしまったか。『機関』にも、少しはできる戦士がいるではないか。」

「...機関？ なんだそれは」

「委員会」の間違いじゃないか？

いや、間違えるはずはない。ならば、希テクノロジーの関係者などではないのかもしれない。だとすると、こいつにもギガロマニアックスとして覚醒する片鱗がある、ということか？ 確かに、普通の人間とは雰囲気が違う。この男の心も、半ば壊れかけているように感じる。そう、私と同じように。

「いいか、それ以上妄想をするな」

気が付けば、私は忠告の言葉を投げかけていた。

「でないと、いずれ妄想に喰われるぞ」

「妄想ができるのは、地球上のあらゆる生物の中で人間だけだ。『もしもこうだったら』。『もしもこうできたら』。現実にはないifを想定することは、肉体的に優れていない人間という動物が手に入れた『危険予測の能力』だが、その力は現代において肥大化しすぎた。夢を喰うという、獏の話を知っているか？」

「知らないな」

「そこは知っとけよッ」

ビシッと指を突き付けられる。

鬱陶しかったので、払いのけた。

代わりににらみつけてやると、男は明らかに怯んだ様子を見せる。

「妄想は、電気仕掛けだ。いや、厳密に言えば、この世界そのものが電気仕掛け、と言える」

「仮想現実だな...！」

男の表情が今度はパツと明るくなった。興奮しているらしい。

「そうか、そういうことだったのか...！ 世界はすでに崩壊し、俺たちは量子サーバー内でデータだけの存在として生きてー」

「そんなことは一言も言っていない」

「あ、そう...」

今度は残念そうに肩を落としている。

だいたいなんだ、その量子サーバーというのは。聞いたこともないぞ。

「お前の見ている景色は、本物か？」

問いかけに、なんと答えるか。それを基準にして、私は相手が『危険か』『そうでないか』をいつも判断している。

そして、この男の答えは。

「自己存在、ひいては世界の否定か。そう思いたくなるのも当然だ。なぜならこの世界は、機関によって陰から支配されー」

「機関など知らない。何度も言わせるな」

たまらず、強引に遮っていた。

こいつ、いちいち話が長いな...。話し方も芝居がかっていてめんどくさい。

どうも調子が狂う。

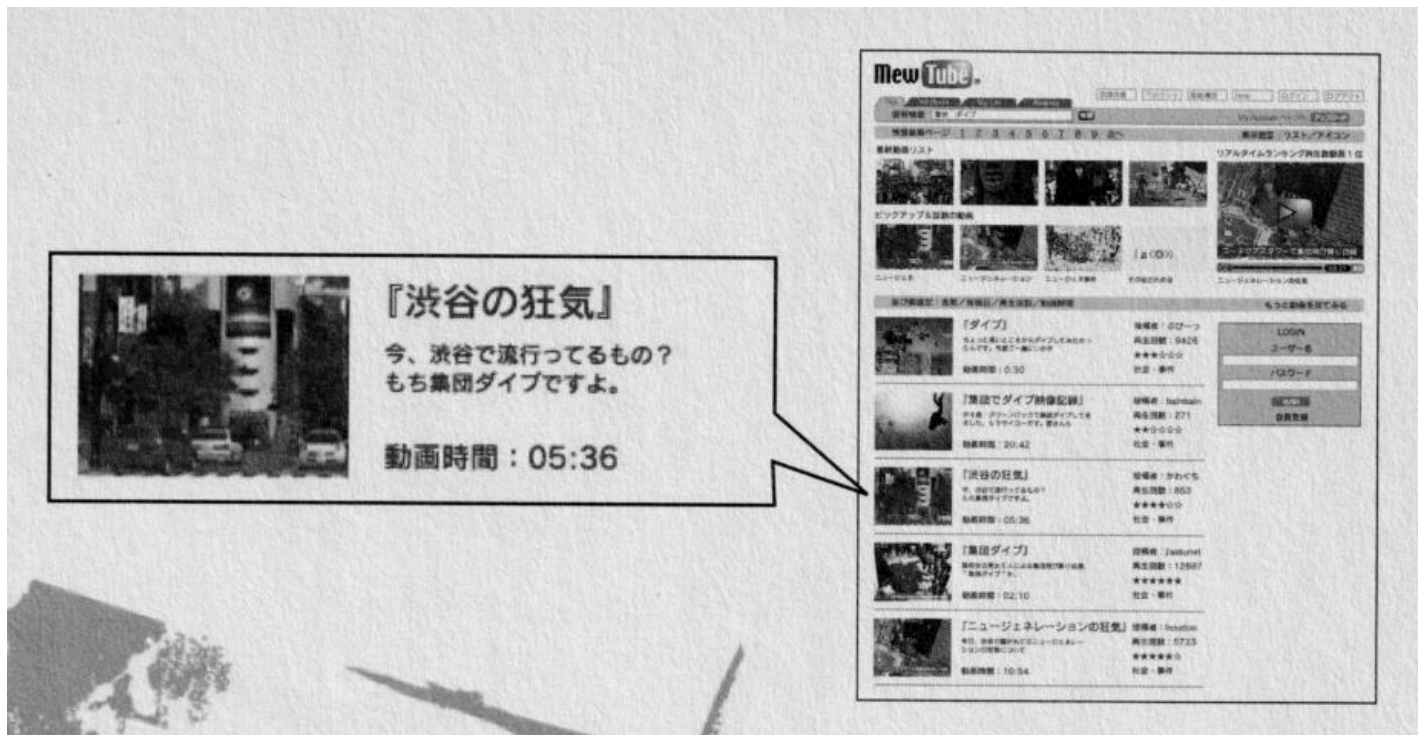
もういいから、この場はさっさと切り上げよう。

「私の今言ったことを、常に頭の片隅に置いておけ」「フッ、俺に忠告するとは...何様のつもりだ」

男は不敵に笑った。その目は、すべてを見透かしているかのようだが、逆に斜め上のあらぬ方を見ているだけのようにも思える。

「ならば、俺からも一つ、伝えておこう。エスパー西條を知っているか？」

「なん...だと...？」



ハッとした。男に向き直る。

西條拓巳がスクランブル交差点で騒動を起こし、それがテレビで全国中継されたのは、つい数日前のことだ。

「あの男を死なせてはならない。世界の命運の鍵は、ヤツが握っている」

「お前...！」

瞬時に、ディソードを鼻先に突き付けた。

だが男は、微動だにしない。

こいつ...単に剣が見えていないのか、それとも動じていないのか。

もし後者だとしたら...私が勝てる相手ではないかもしれない。

悟られないように、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「なにを知っている？西條を煽ったのは、お前か？」

「あのスクランブル交差点での事件は、予兆に過ぎない。終末のときは、すぐそこまで迫っている。近いうちには血の海と化すだろう」

「そんなことはさせない」

「2000年という長き胎動は終わった。すでに、"侵蝕"は始まってしまっているのだよ...！」

こいつ、なにを言っているんだ？

混乱する。こんなことは初めてだ。私の知っている真実と全然違う。

「蒼井セナ、と言ったか。お前と出会えて、よかった。だが、次会うときは敵同士だな。そのときは、絶対に躊躇するな。全力で、俺を殺しに來い。生半可な気持ちで挑んで來ると言うのなら...死ぬぞ」

「...なに？」

殺しに來い？ こいつはやはり敵か？ さっきまでは傍觀者的立場のような話しぶりだったが。いや、しかし『次会うときは敵同士』ということは、今は味方なのか？

くっ、この男がなにを言いたいのか、まるで分からない。

そこで、ふと気付く。というより、自分自身に言いい聞かせる。

もしかして、こいつの話は、すべて妄想じゃないか？

いや、妄想というのは語弊がある。

あえて言い直すなら。

こいつの言っていることは、すべて口から出任せなのかもしれない。

「我が名は、鳳凰院凶真」

男は、今さら自己紹介を始めた。

明らかに偽名と思えるその名。あからさまなまでの尊大な態度に、私はイラッとする。

「フェニックスの鳳凰に、院、そして凶悪なる真実。人は俺のことを、畏怖をこめて、狂気のマッドサイエンティストと呼ぶ。貴様とは、また会うことになるだろう。それが、シュタインズゲートの選択だ。エル・プサイ・コングルウ」

立ち去ろうと私に背を向けた男の膝裏に、試しに蹴りを入れてみた。

「あっ...！」

軽く蹴ったつもりだったが、男はぐにやりと膝から崩れ落ちてしまう。

「ぐっ...おのれ、不意打ちとは卑怯な...！」

尻餅をついたまま、男はあたふたしていたかと思うと、いきなり奇声を発して自らの右手をつかんだ。

「う...ぐああっ！　こんなときに、右手が疼く...っ。近寄るな、でないと、力が暴走を...！」

その右手が、不自然にぶるぶると痙攣している。

こいつ、もしかするとただのバカかもしれない。いや、もしかしなくても、ただのバカだ。そうに決まっている。

「お前には、見えているか？」

「な、なにがだ？」

「私の持っている、これだ」





私は、ディソードの切っ先を、へたり込んでいる男に再び向けた。

リアルブーツはしていない。だからギガロマニアックスの素質を持つ者にしか、これは見えない。

男は右腕を押さえたまま、かすかにうなずいた。

「...ああ、見えている。あまりにも鮮烈、見る者の目を釘付けにして離さない、その残酷なまでに美しい、剣が」

「見えて、いる？ 本当か？」

「無論だ...。まさか、生きて目にすることができようとはな。妖刀...朧雪月花。実に見事な、日本刀だ...」

「ウソをつくなっ！バカが！」

思い切り股間を踏んづけてやった。「ぐわあっ！」と悶絶している男を置いて、とっととその場を立ち去る。

まったく、紛らわしい...明らかに見えてなかったじゃないか。

あんなヤツのデタラメな話に混乱させられるとは、屈辱だ。

なにより、時間の無駄だった。ポーターも取り逃がしてしまったし。

と、ポケットの中のケータイが着信音を鳴らした。

出てみると、かすかな吐息だけが聞こえてくる。それだけで、相手が誰なのかは分かった。

「稍か。今、変なヤツに会ったよ。そいつと話していたら、なんだかすごく疲れた…」

その日は、そんな愚痴をこぼして終わった。

けれど、もしも男の語った言葉を「予言」と仮定するなら。

—およそ一週間後に、それはほぼすべての的中した。

その事実を、サードメルト後に私は思い出し、一瞬、慄然としたのだが。

「ま、単なる偶然だろ」

最終的には、そう結論づけた。

その後、あの鳳凰院とかいう男の名を、私が思い出すことはなかった。





